

# パンダのエアライさん

## は昔ながら吸血鬼??

### 1. 石井部隊のこと

四一四五五、という。

### 2. 人体実験と生体記録の「満州医大」

この「陸軍軍医中將滿州医大教授」

『人事興信録』、『日本紳士録』  
『大衆人事録』などという日本中の  
の「有名人」の辞典がある。

はくそにのぞいた。証言によれば、一九四二年に  
関東軍七三一部隊(石井部隊)の部隊長となり、  
一九四五までの四年間、五、六〇〇人の中  
国人を生体実験、殺していったという。また、

それらを総合すると――  
北野政次(ハコ) 明治二七年七月  
一四日生、大正九年東大医学部卒、  
陸軍軍医中將滿州医大微生物学教  
授を経てシドニー十字顧問東京スラ  
ン下長に就任、東京都世田谷区代  
田二丁目一三二(電話03四二

彼が指揮して江南地方でバス上国をつけたノ  
ミを飛行機ではちまいた、と後に裁判で関東  
軍司令官山田が証言している。北野は敗戦直  
前に帰国、追及をまぬかれ現在に至っている  
という。「こんな人物が「パンダ」のエアライと  
んなの関係? 別冊付録も共に読んで下さい。

# 石井部隊のパンダ ―旧満洲国哈爾濱市郊外の思い出―

滿洲では、太陽が丘からあかつてきて、夕  
方には畑へ走んで行った。滿洲といつても立  
いけれど、私がそんな体験をしたのはハルピ  
ンの郊外だった。

ハルピンは漢字なら哈爾濱、ロシア人もた  
くさん住んでいる大都会だ。侵略者である日  
本の匂いのする都会の名は、新京が長春、奉  
天が瀋陽というように、革命後の中国では変わ  
っているが、ハルピンはいまもハルピン、日  
本侵略前からの古い名前を保っている。

ところで、私が畑からあがつて畑に走ると太  
陽を眺めたのは、日本人がイパッテいた時代  
のハルピンである。一九四一 昭和十六年  
の夏、かぞえ年十七歳のとき、私はそこまで

流れていったのだ。

知り合いが居ることはいた。  
子供のとき、とても可愛がってくれたトナ  
リの家の主人が土ま屋で、ハルピンに大きな  
現像を持って来たからだ。私はそこへ頼って  
行く昇段で東京↓下関↓釜山↓奉天(瀋陽)  
↓ハルピンの長旅を一人でした。

そして、もちろん中国語はまるで知らない  
のだけれど、うまく尋ね当てるので郊外も郊外、  
うねうねとしたゆるやかな起伏で畑がフブイ  
ているドマンナカ。知り合いが親方をし  
ている現像事務所へたどりついた。  
飛行機を造っているのだという。  
事務所、食堂、倉庫、日本人宿舎が一つに

かたまし、ずつと誰れに現像の近くに、中国本土の山東省と河北省からつれてこられた苦力(中門)の行方を知る。要するに飯塚巴が、土壁作りで窓が少なく、電灯もないからうす暗い。裏中は二段式で壁のくるりにまわっている。一夜に四、五十人はいる。そんな建物がいくつかあつて、周回は鉄條網のカキネでかこまれ、一つしかない出入り口にはロシア人の番人がいつも椅子にこしかけている。

夕口部屋とか半夕とかいろいろあつて、北海道の炭坑やら大正近頃のやら私も今日までにずいぶん経験したけれど、あんなひどいのは知らない。

中国人労働者を強制的に奴隷から追い立ててきて、そういうヒンサのなかで仕事をさせたのが日本軍国主義。などとテイサイあつた言い方をすれば、つまりは日本人であつたわけだ。

私は事務所の仕事に足りのよつなことで約二

カ月その現場にいたが、その間、私だつて日本人だからというだけで大きなツラをしてたのだ。カギツ子のくせに。

で、その飛行機建設というのは、滑走路に栗石を敷いておける段階で、奥に大きな砕石機械が据えつけられていた。機械から出てくる石を、上半身ハダカの中の人労働者が、平べつ広いカゴに入れて碎で押しで運ぶ。そのカゴは、首、日本の土方や石炭仲仕が使ったパイプケに似ていた。

滑走路は長い。そして、ずうつと向うの方の、カスンで見えるような遠くに滑走路を必至とする軍隊の、色くガツシリ輝く巨四角い建物が見えた。

石井部隊——というのだぞうだが、兵隊が演習したりする姿はちつとも見えない。いつも、なにかシーンとした感じで、人間はいないんじゃないかと疑いたいような建物だ。あつちへはゼツタイ行つてはいけな

事務所のチーフから私はきつくないと渡されてきた。中国人労働者の宿舎のまわりに鉄條網のカキネがあることはすでに書いたが、部隊の近くにはもつともつと嚴重な、電流を通した鉄條網が張りめぐらされておる。部隊は秘密研究なのだといふ。

そんなものかと思つて、東京へ誓ひ戻るまでの約二カ月、私は大して気にしなかつた。それから「大東亞戦争」となりやがて日本が負けて、細菌兵器の研究をしていた石井部隊、ということがあきこえてきて、私は本当に「アッ」と思つた。

石井部隊というのが現実にどんなものかだか、この特集の他の筆者があまりかしくしてくるはずだ。また、特集のテーマである「パンクレー」株式会社ミドリ十字と石井部隊との関係についても、私もそれを早く読みたいと思つている。乞え聞くような残虐な「研究」をする部隊の仕事をして、あの中国人労働者たちは無事にクニへ帰れたかどうか。たつた一人、名前をおぼえている徳海山、すこくまづい話を訊かせてくれた彼や彼の一党やみんなは、

(16)

写真ページハフク

28~34ページ

# 写真 人体実験と生体解剖の「満州医大」

北野政次(ミドリ十字相談役)の罪状をあばく。——

ここに紹介するのは、本多勝一という人が書いた「中国の日本軍医」という本だ。へんせしせし、創樹社刊、ハハのえん。本多さんは、実際に中国へ行つてきて